

薬剤師の介入により減薬が可能であった 2 症例

今城宏文¹⁾、篠原園枝¹⁾、徳竹加奈子¹⁾、櫻井浩¹⁾、高田昌宏¹⁾、原田和行¹⁾、久保田賢治¹⁾、一瀬康弘¹⁾、廣原 正宜²⁾、串田一樹²⁾

1) アーク調剤薬局 2) 昭和薬科大学

【目的】

近年、薬局薬剤師はかかりつけ薬剤師機能をはじめ、健康サポート機能や高度薬学管理機能などさまざまな役割が求められている。調剤業務においても対物業務から対人業務へとシフトしている。薬局薬剤師が、地域のチーム医療の一員として処方支援を行うことで薬物治療の有効性、安全性に寄与することが期待される。今回、薬剤師の介入により処方の適正化が行えた 2 症例を報告する

【症例の概要】

症例 1：80 歳代、男性 認知症、糖尿病の既往があり、在宅加療中の為、居宅療養管理指導を行っていた患者。薬剤を 8 剤（1 日 2 回朝夕食前）服用していたが、夕食前のアドヒアランスが不良であった。糖尿病治療薬はボグリボース 0.2 mg 2 錠/日とテネリグリブチン 20 mg 1 錠/日を服用されており HbA1c は 6.3%であった。

症例 2：70 歳代、女性 心房細動、うっ血性心不全の既往があり、外来通院されていた。服用剤数が多く、自己判断で薬剤を中止しており、医師に報告していなかった。アロプリノール 50 mg 1 錠/日、ラベプラゾール 10 mg 1 錠/日の処方があったが、服用していない状況で胃部不快感なく、尿酸値 5.8 mg/dL であった

【結果】

症例 1：現在の HbA1c は目標値を達成していること、夕食後のアドヒアランスが不良であることから、ボグリボースの中止を医師にトレーシングレポートで提案。その後、医師と協議を行い、ボグリボースは中止となった。

症例 2：アロプリノールは服用していない状態で尿酸値のコントロールがよいこと、逆流性食道炎や胃潰瘍の既往がなく、胃部不快感がないことからラベプラゾールの中止をトレーシングレポートで報告。医師との協議し、両薬剤は中止となる。

【考察】

薬剤師が患者の訴えから、処方薬を再検討することで、処方の適正化に貢献できたと考える。処方の適正化には、患者との信頼関係、状況把握、検査値の理解、関連ガイドラインや文献の読解力の他に医師との連携が重要と考えた。特に患者や医師と薬剤師のコミュニケーション能力は、薬剤師業務が対物業務から対人業務と推進しているなかで非常に重要な能力と考えられた。処方の適正化に貢献することは薬剤師重要な業務の一つと考えられる。